

沖ノ島出土舶載遺物の再検討

——特に金銅製龍頭の流伝に関して——

弓 場 紀 知

1 はじめに	4 龍頭の装着と使用法
2 金銅製龍頭の発見と形状	5 5号遺跡出土の金銅製龍頭の流伝
3 金銅製龍頭の諸例	6 おわりに

1 はじめに

玄界灘の孤島、沖ノ島は我が国最大の祭祀遺跡であり、その存続年代、さらに豊富な遺物は他に類をみないものである。

昭和29年より始められた沖ノ島祭祀遺跡群の発掘調査は44年～46年の第三次調査によって10万点あまりの遺物を数え、今日一括して国宝に指定されている。

第一次・第二次の調査は古墳時代の祭祀遺跡の調査に主眼がおかれ、4世紀から6世紀の遺跡、遺物への関心が主体であった。それに対して第三次調査は7世紀以降の、いわゆる歴史時代以降の祭祀遺跡が調査の主体であり、律令祭祀に関わる祭祀遺物を豊富に検出し、沖ノ島祭祀遺跡が歴史時代においてもわが国の中心的な祭場として位置していたことを明らかにした。

なかでも5号遺跡は第三次調査のハイライトとなるべき遺跡であり、その遺跡構成、遺物の内容は第二次調査時では検出されなかったものである。5号遺跡は沖津宮社殿上のB号巨岩とC号巨岩にはさまれた平坦な地にあり、岩陰、そしてその前庭部に土器や、金銅製祭祀用具、鉄製祭祀用具、唐三彩や金銅製龍頭などが奉献されていた。

遺物の主体は7～8世紀代の奈良時代の遺物であり、なかでも金銅製龍頭と唐三彩が同時に奉献されていたことは、この5号遺跡が、沖ノ島祭祀遺跡のなかでもきわめて重要な意味を含んだ祭場であることを考えさせるものであった。

本稿では5号遺跡出土の金銅製龍頭に着目し、新しい知見を加え、その伝来と、使用法について考えていこうとするものである。この金銅製龍頭については杉村勇造・

2 金銅製龍頭の発見と形状

岡崎敬の両氏によってその使用法、年代について詳細な論考がなされており、筆者もかつてこの金銅製龍頭を紹介したことがあり新たに加えるべきものはほとんどないといってもよい。しかしその流伝については、両氏ともはっきりとは述べておらず、あいまいながら中国産と考えられておられる。筆者はこの金銅製龍頭の伝来について、いくつかの新しい知見を加えながら考えていきたい。

2 金銅製龍頭の発見と形状

金銅製龍頭は沖ノ島第5号遺跡から出土した。5号遺跡は沖ノ島祭祀遺跡群では沖津宮社殿にもっとも近い位置にあり、社殿の背後にそびえるB号巨岩とその後ろのC号巨岩に囲まれたところの狭い地形にある。B号巨岩は中が洞穴状になり、沖津宮の方はかつて「御金蔵口」と称され、沖ノ島祭祀遺跡から採集された遺物の集積場としてさまざまな遺物が投げ込まれたところである。金銅製の馬具類などは大半がかつてはこの「御金蔵出土」とされていた。またこの洞穴は縄文時代中期の遺物を包含し、祭祀遺跡以前の生活址ともなっていたところであり、かなり古くより、沖ノ島をベースキャンプとした縄文時代の漁民達によって利用されたところである。

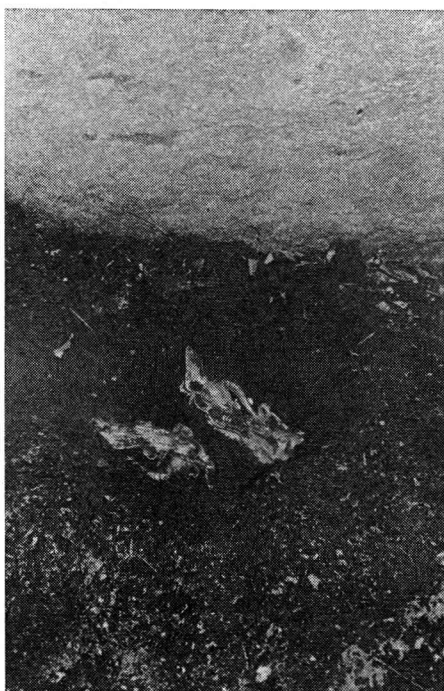


写真1 金銅製龍頭の出土状態 沖ノ島第5号遺跡

B号巨岩は、沖津宮社殿の方に大きくせりだしており、社殿におおいかぶさるように傾斜しているが、5号遺跡側ではまっすぐにのびており、裾の方は岩に亀裂が入り、岩が剥離して5号遺跡に落下しているようなところがある。このB号巨岩に接するようにC号巨岩があり、このB号巨岩とC号巨岩にとりかこまれた少し平坦な地形が5号遺跡を形成しているのである。

金銅製龍頭はB号巨岩側の岩裾から発見された(写真1)。5号遺跡全体から見れば少し離れた位置から出土している。

5号遺跡の遺物はB号巨岩とC号巨岩が接したもっとも奥まったところに遺物が

集中しており、金銅製紡織具のミニチュアや土器類、鉄製ミニチュア、滑石製品の大半はこの位置から出土した。金銅製龍頭はこれら5号遺跡の遺物から少し離れた位置で出土したことはまず注目してよいことである。

さらにこの金銅製龍頭は正式の発掘調査によって出土したものではなく、昭和44年春の予備調査の際に、まったく偶然の機会に発見されたものである。この発見の経過については『沖ノ島Ⅰ—宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報』や『宗像・沖ノ島』に詳しく述べられており、詳しくはそちらによられたいが発見地点について要約すると次のようなことになる。

- ① 5号遺跡の道路のすぐ傍らの岩蔭から出土した。
- ② 遺物は腐蝕土の下20cmのところから発見された。
- ③ 2つ発見され、1つは頭を奥に向けており、1つは頭を道路に向けていた。B号巨岩側の方は腹を下にしており、もう1つの方は横になっていた。

まったく偶然の発見であり、その発見時には考古学専攻のメンバーは加わっておらず、図面をとることはできなかったが、その発見時の形状については写真が残されているだけである。これが原初的な位置であるのか、それとも掘り出して、もう一度置き直した位置なのかは明らかではないが、おそらく後者の状況であろうと考えられる。

5号遺跡は昭和44年秋の調査以前にも注目されており、第一次調査(昭和29～30年)の時には、表面調査は行われている。29年8月の第一次第2回目の調査の時に5号遺跡の表面調査が行われ、須恵器や鉄器(剣身、刀身、斧、鉄片)、金銅装馬具(杏葉、鉾留縁金具)や各種金銅製品が採集された。この時採集された金銅製品は「用途不明の金銅製品」として『続沖ノ島』に写真と実測図が掲載されているが、第三次調査で第五号遺跡から出土したものと同じ種類のものが多く、5号遺跡出土遺物であることは間違いない。『続沖ノ島』によれば次のようなものが採集されている。

- ・金銅製五弦琴 1 (長19.8cm, 幅5.5cm)
- ・ " タタリ 2 (完形品1, 台座1)
- ・ " 円板 2
- ・ " 短冊形銅板

これらの遺物は現在所在不明であり、宗像大社にも残されていない。この5号遺跡を調査した当時の担当者は、5号遺跡の金銅製龍頭発見に対して強い疑念をいだいており、発見当時さまざまな見解を公表したことはよく知られている。しかし第一次調査の際は5号遺跡のC号巨岩付近の遺物を中心に採集しており、B号巨岩側からはあ

2 金銅製龍頭の発見と形状

まり遺物を採集していない。またこの時の調査は床面の表土をはらった全面的な調査ではなく、表面に浮いた遺物の採集である。その点で、金銅製龍頭についてはみおとされたと考えなければならない。

昭和44年秋に行われた5号遺跡の発掘調査では唐三彩瓶の口縁部をはじめとして各種土器類(大甕, 長頸瓶, 器台, 壺, 高杯), 金銅製祭祀用具(人形, 鐸, 容器, 雛形紡織具, 雛形五弦琴), 鉄製祭祀用具(刀子, 斧, 矛, 刀), 滑石製玉類(臼玉, 平玉)など豊富な遺物が発見された。ただ金銅製龍頭に関連すると思われる遺物はなく, 出土遺物の主体となるものは須恵器, 土師器を中心とする祭祀用土器と, 金銅製や鉄製の祭祀用具である。金銅製龍頭が発見された付近は遺物の量がもっとも少なく, 器台の破片と, 中世の鉄製鐸口だけである。

金銅製龍頭が祭祀の時点から5号遺跡におかれ, 今日の発見の時点まで移動していないか, それとも別の位置(他の遺跡)にあったものが, ある時点に5号遺跡に移動されたものかは多少の疑問が残される。5号遺跡から発見された遺物では唐三彩瓶の口縁部片がかつて7号遺跡から発見された唐三彩の破片(2片)とまったく同一個体であり, ピタリと接合されるということがあったことは注目すべきである。金銅製龍

頭についても, 発見された位置が他の遺物と少し離れており, 2つが表面下に隠置されたように設置されたことは後世に置き直されたと考えられなくもない。

さてこの金銅製龍頭一対であるが, 細部に少しずつ違いがあり, 別々の型によってつくられており, 厳密には一対ではなく, ここでは龍頭A, 龍頭Bとして記述する。

龍頭A(図版①上) 全長19.5cm。口は上唇と下唇が大きく開いており, 上唇は湾曲しながら上にそり上がっている。口は体部の奥深く切れ込み, 中に大きな牙が1本と小さな牙が2本表現され, 最奥部には6本の波形の歯形が表現されている。眼球は大きく, 上唇との間に鼻孔がある。眼球の上には長い角が1本あり, 背の端部の方にのび, 角の端部はくると折れ曲がっている。体部の腹部側面には前に2本, 中央



写真2 金銅製龍頭Aの正面(中央に鉄芯がつまっている)

に2本、後ろに3本の鰭があり、眼球の背後にも2本の鰭が表現されている。腹は蛇腹状になる。体部側面と体部下面にはヒョータン形の押形文様がある。龍頭の後端部は筒形になり中空で、空洞は中にまでのび、端部には径5mmの目釘孔が左右に1つつとりつく。筒径は端部で3.1cmをはかる。また龍頭の先端、上唇と下唇が接するところには鉄芯の残欠があり、何かを差し込んだものと考えられる(写真2)。龍頭の基本形は体部が弧状になり、そこに龍頭形の装飾が施されたものである。厚い銅地の上に鍍金が施されている。重さは1670gである。

龍頭B(図版①下) 全長20.0cmと龍頭Aより少し大きい。全体的にはほとんど変わるところはないが、龍の歯の数が5本であり、Aより1本少ない。また重量は1645gとAより少し軽い。後端は筒形になり、同じような目釘孔が左右に1つつあり、上唇と下唇の間には何かを差し込んだあとの孔が空洞となっている。体部後部の側面にはAと同じようにヒョータン形の文様が施されている。

この竜頭A、Bは少しディテールを異にしているが、ほぼ同形同大のものであり、一対として用いられたものであることは間違いない。

先に述べたようにこの龍頭は基本的に弧状の円筒に龍頭飾りがなされたものであり、後端の円筒に筒形の棒状のものを差し込み、端部の目釘によって取り付け、先端の上唇と下唇の間に金具を取りつけて、旗を下に垂らしたものである。竿頭もしくは旗指物の先端に取りつく金具であることには異論はない。しかしこの龍頭に差し込む竿は龍を水平に保つためにはL状形、ないしは隈丸の筒状のものがジョイント金具としてそなわっていなければならない。

この龍頭に取りつく竿に関連すると思われる遺物は5号遺跡からは何も出土していない。しかし第一次調査で8号遺跡から出土した中に金銅製龍頭に関連すると思われる遺物がある。これは「金銅銀装矛鞘」(写真3)と称される遺物で、矛鞘というよりも石突と考えるべきものである。

この矛鞘と称される遺物は『沖ノ島』のP93～94に記述されており、ここに少し述べておきたい。

この遺物は8号遺跡の西南区の岩陰前線に主軸をほぼ平行にして、先端を東北に向けて出土している。全長30.6

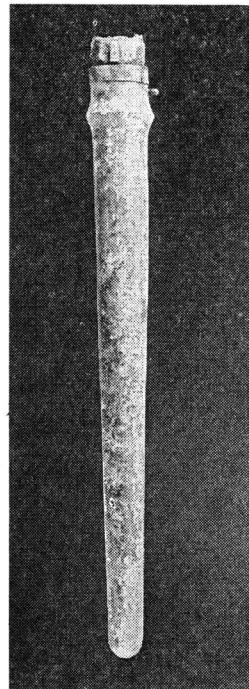


写真3 金銅製石突
沖ノ島第8号遺跡出土 長30.6cm

3 金銅製龍頭の諸例

cm, 口金と鈕が銀製になり, 他は金銅製である。先端は丸くなり, 口金の方が少し太くなり, 鞘口と称されるところには突帯があり, 口金のところは銀板がまかれていて。径は口部より2.5cm離れたところで径3.5cm, 中央径2.5cm, 先端近くで1.7cmを測る。鞘口のところには環状の飾りが一つつく。この金銅製の円筒の中には鉄芯がつまり, 報告者はこの内部の鉄芯を鉄矛と考え, この円筒を矛鞘と理解したのである。また円筒の口先には木質部が残存しており, これを矛の柄の部分と理解している。

8号遺跡出土のこの金銅製円筒については現状からみる限り, 矛鞘と考えることは無理があり, むしろ旗指物や竿などの下端にとりつく石突と理解した方が無理がないようにおもわれる。

しかし, そうかといってこの金銅製石突(8号遺跡出土の矛鞘と称されるもの。今後は石突と称する。)が, 5号遺跡出土の金銅製龍頭と直接むすびつくものであるかどうかについては速断はさけたい。しかし石突の先端の口径は3.5cmであり, 龍頭の後端部の円筒径は3.1cmであり, 両者はかなり近い数値であることは注目してよいことである。また, 石突の口先の木質との装着は銀製鈕と留金によっており, 龍頭の後端の留金具の状態と近いものである。

ただ出土した地点が5号遺跡と8号遺跡であり, 両者の遺跡は約10メートルほど離れており, 8号遺跡の方が高い位置にある。しかし5号遺跡出土の唐三彩の例にもあるように2つの遺跡に分かれて出土した遺物が接合することもあり, 後世, 何らかの事情によりどちらかが動かされたと考えられなくもない。また当然のことながら, 沖ノ島という遺跡では木質は遺存することがむずかしく, 龍頭と金銅製石突の間を結ぶ木製の柄の部分は朽ちてしまったと考えられなくもない。

この金銅製龍頭によって飾られた竿がどれほどの大きさのものであったかは明らかではないが, せいぜい1~2mほどの長さではなかったろうか。また奉献された当時, どのような状況で祭場に置かれたかについても知る由もないが, 8号遺跡出土の金銅製石突が5号遺跡出土の金銅製龍頭につながる遺物であるとするならば, 岩裾に立てかけられて, 祭場の前に立てかけられたものであろうと考えられる。

次にこの金銅製龍頭の類例について, いくつかの新しい知見を加えながら紹介していくことにする。

3 金銅製龍頭の諸例 ——韓国出土および伝来の例を中心に——

金銅製龍頭の例については杉村勇造・岡崎敬両氏によっていくつかの例が紹介され

ている。杉村勇造氏は金銅製龍頭の実例については例をあげておられないが、その龍の形式については出光美術館所蔵の伝天龍山石窟の龕の入口の側壁に飾られた龍のレリーフ（写真4）を例にあげ、東魏時代のものとしている。この龍のレリーフは長さ29.0cmで龕の左右に飾られ、龕の中では龍は下を向いている。大きな眼球と上に向けてのびた上唇、眼球の上から背にのびた一本の角、口の最奥の歯の形態など、たしかに沖ノ島出土の金銅製龍頭に形式的に近いものである。しかしこの龍頭は石窟の龕の前側壁を飾るレリーフであり、資料的には少し異なるものである。

中国ではこの龍頭飾りに類するものはあまり例がないが、陝西省博物館に戦国時代のもので唐代のものが一つずつある。戦国時代のは題箋に「西安市出土羊飾車飾」とあるもので、筆者が昭和53年秋に訪中した時に実見した。その折のメモとスケッチによれば円筒形で一端が羊頭形になり、中央に突帯があり、鳥形の飾りがつき、後端はラッパ状にひろがり、一方に方形の孔がうたれている。全長についてはメモがないが15cm前後のものではなかったかと思う。もう一つの例は唐代のもので陝西省西安王莽公社出土とあるもので、こちらは龍頭形の車軸金具である。円筒形で、先端は龍頭形となり、背には一角があり、眼球がある。こちらは金銅製であるが、用途は戦国時代の例と同じく車軸金具である。龍頭に関してはむしろ韓国の方に類例が多く、沖ノ島のものと近いものが多い。次にそれについて述べていくことにする。

a. 雁鴨池出土の金銅製龍頭（図版②-1）

韓国慶州市の雁鴨池は統一新羅時代の 宮殿の一部 であり、『三国史記』新羅文武王



写真4 伝天龍山石窟の龍頭レリーフ 長29.5cm 東魏時代 出光美術館蔵

3 金銅製龍頭の諸例

14年（西暦 674 年）二月条に「宮内に池を掘り、山を造り、草花の種子を播き、珍しい鳥やかかった獣を飼育した」（井上秀雄訳『三国史記 1』東洋文庫 p 232による）という項があり、この池が雁鴨池であろうといわれている。雁鴨池遺跡は 1975 年から 1976 年にかけて発掘調査が行われ、遺跡は現在史跡公園として復元されている。雁鴨池発掘の結果、瓦埴 5798 点、容器 1748 点、木材 1132 点、金属 843 点、木簡 86 点、鉄器 694 点、動物骨 434 点、石製品 62 点など約 15000 点の豊富な遺物が出土し、その出土遺物の中には正倉院御物と似たものが多く、金銅製はさみや、青銅匙、佐波理容器などは正倉院伝来のそれとまったく同じものである。

金銅製龍頭はこの雁鴨池遺跡から二つ出土している。まさに一対と称すべきものである。長さ 15.7cm、高さ 10.5cm と沖ノ島のものよりいくぶん小さい。現在慶州国立博物館に展示され、1983 年の「韓国古代文化展」（東京国立博物館他）に出陳されている。先端は龍が口をあけ、鼻孔が開き、上には角が 2 段につく。龍はちょうど口をあけた状態で上と下から牙が 1 本ずつのび、さらに口の中に舌部がみえ、舌は上にまき上げたような形をしている。体部中央に眼球がつき、後端には長い角がつく。全体の姿は沖ノ島出土の龍頭とは異なり、主軸はほぼまっすぐであり後端も沖ノ島のように正円形の筒状になるのではなく、まわりは鱗状をなす。端部の上・下・左・右の四方には一つずつ目釘孔があり、目釘が残っている。この一対の龍頭がどのように用いられたかは明らかではないが、竿頭とすれば、後端に棒状の柄が挿入され、先端の舌部の巻き込んだところから旗を垂らしたものであろう。しかし主軸はほぼまっすぐであり、後端はやや面取りされたような状態であり、旗指物にとりつくというよりも、柱の先端などにとりつけられた金具である可能性も強い。

雁鴨池は宮殿遺跡であり、報告書によればこの一対の金銅製龍頭は雁鴨池遺跡の池の護岸の石築の東岸側から出土している。建築遺構は池の西側から南側に検出されており東側には建築遺構はほとんどない。このような遺構の状況から考えてみれば、建築物の装飾に用いられたか、単独で旗指物に伴うものであったかは判断しがたい。この雁鴨池遺跡出土の金銅製龍頭と似たものが、ソウルの湖巖美術館に所蔵されている。

b. 湖巖美術館所蔵の金銅製龍頭（図版②-2）

この金銅製龍頭は『湖巖美術館名品図録』の第 162 図に掲載されており、こちらは一対ではなく一つだけである。しかし雁鴨池の例から考えればもとは一対であったと考えるべきものである。全長 35.2cm、高さ 30.5cm あり、雁鴨池のものよりひとまわり大きい。先端は龍頭形となり、後端は方柱状を呈している。湖巖美術館の龍頭は口を

閉じた姿をしており、上の歯列を外に出している。口の中央には鉄芯が下にのび、途中で折れている。鼻孔や眼球、頭部の角ははっきりと表現されているが細部の鱗などは省略されている。後端の方柱状の部分の側面には2ヶ所に目釘孔がある。眼球するどく威厳にみちた龍頭である。

この湖巖美術館所蔵の龍頭は図録では「金銅龍頭吐首」となっており、解説文には建築物の端金具と考えている。すなわち楼閣の屋根の四方にのびた軒先に取りつける金具であるとするもので、軒先の四方の柱にこの龍頭を取りつけ、そこから布の旗を垂らして殿閣を飾ったものと解釈している。ちなみにこの龍頭の年代は統一新羅時代末期から高麗時代初期、10世紀ごろと考えられている。

c. 国立光州博物館所蔵の金銅製龍頭一対（図版②-3）

一対あり、一つは長さ23.5cm、一つは24cmと少し長さは異なるが一対として使用されたものである。水平な円筒形で先端に龍頭形の装飾がある。鼻孔が突き出しており、口は閉じた姿をしている。眼球の上には角が2本あり、体から上にのびるのではなく背にそって後にのびており、いくぶん簡略化された表現である。後方の円筒には鱗状の文様がタガネによって彫り込まれている。筆者は実見していないため正確な状況についてはつかみがたいが、写真でみる限り後端は正円形ではなく、頂部が隈丸となった台形を呈しており、四方に小さな目釘孔が設けられている。いわゆる竿頭にづく龍頭ではなく、建築物もしくは家具の先端飾りとして用いられたものではないだろうか。年代は高麗時代、12世紀頃と考えられている。

d. 慶尚北道・榮州出土の金銅製龍頭（図版③-1）

韓国国立中央博物館に所蔵されている巨大な龍頭で、これも「韓国古代文化展」に出陳された。この龍頭は1976年、慶尚北道・榮州で建設工事中に発見されたものである。全長は65cmあり、龍頭の頭部とそこから長く太い頸がのび、端部は平坦にしている。銅地の上に厚く鍍金が施されている。大きさは今まで紹介してきた龍頭に比べてかなり大きいものであるが、様式的には沖ノ島出土の金銅製龍頭にきわめて近いものであり、詳しくみていくことにしよう。

まず全体のプロポーションであるが、上に龍頭があり、龍頭はほぼ水平にのび、頸部が龍頭に対し少し斜めにのびている。龍頭は上唇が大きく上にのび、上辺で少し折れ曲がって先にのびている。口は龍頭の奥深く切れ込み、上唇と下唇から大きな牙が1本ずつ上にのびている。頭部中央には大きな眼球があり、眼球の上にはとまか鶏冠状の飾

3 金銅製龍頭の諸例

りがつき、眼球の後方には何重にも細いタテガミ状の表現があり、勢いに満ちている。太い頸部は頭部から下にいくにしたがって太くなっており、下端は平坦になされている。頸部の背には下向きに垂れた鰭状の突起が八つつく。

龍の開いた口の中には円形の滑車が内蔵され、そこから旗が垂らされるようになっている。今まで述べてきた龍頭の中で機能がはっきりとわかる例であり、明らかに竿頭というべきものである。この竿頭はさらに別の柱にとりつき天空高くつるされて、龍の口から旗が垂らされたものである。

さてこの龍頭竿頭の細部の表現をみると沖ノ島5号遺跡出土の龍頭ときわめて似て

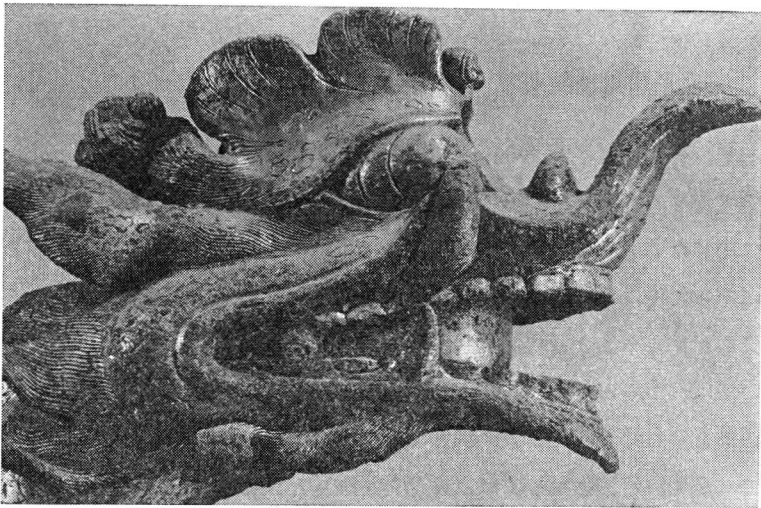


写真5A 韓国榮州出土の金銅製龍頭の頭部

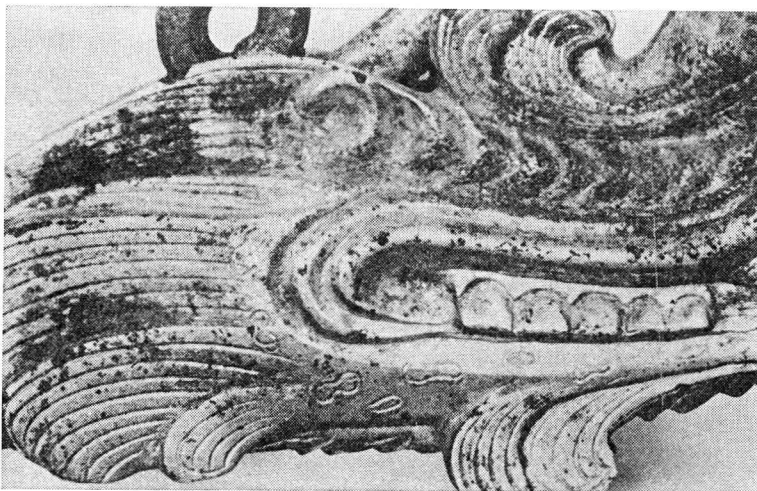


写真5B 沖ノ島5号遺跡出土の金銅製龍頭の側面細部

いることに気がつく（写真5A・B）。まず龍頭の唇部の表現である。上唇は大きく上にのび、途中で折れ、端部は少し上向きかげんにのびている。さらに唇上の肉を押し上げるようにして牙が上にのびている。さらに口の歯列の表現もよくみると下を水平にして台形に一列に列んでおり、沖ノ島のそれときわめて似た表現であることが理解される。

榮州出土の龍頭の鶏冠の表現についても沖ノ島出土の龍頭にきわめて近いものである。榮州の龍頭の鶏冠は眼球のすぐ上に取りつき、二つの鶏冠が龍頭の主軸に直交するようにのび、一つの鶏冠の中にはタガネ状のもので切り込みが入れている。これに対し沖ノ島の龍頭の鶏冠は眼球の後ろに垂れているが、鶏冠は眼球に直交するようにのび、鶏冠の中にはタテに切り込みが入っている。

この両者にもっとも共通する特徴は龍頭の体部に装飾されたヒョータン形の彫刻文様である。榮州出土の龍頭は眼球と鶏冠の間と、唇のまわりの肉の盛りあがったところに不定形の雲形の飾りが点々と散らされている。ヒョータン形を呈するものもあれば、雲気文ととれそうなものもある。沖ノ島5号遺跡出土のものにも口唇の盛りあがった部分に同様の文様が散らされている。沖ノ島出土の龍頭の場合は唇のまわりの肉の後方から下唇のまわりにヒョータン形の文様が不規則に配されている。一定の方向性はないが、唇のまわりの盛りあがった肉の部分に集中していることが特徴である。雁鴨池出土の金銅製龍頭や、湖巖博物館所蔵の金銅製龍頭にはこの文様はみられない。

榮州出土の龍頭竿頭の頸部には一面に海波文形の鱗状の装飾が体部外面にタガネで施されている。

榮州出土の龍頭竿頭と沖ノ島5号遺跡出土の龍頭は大きさにおいてはかなり異なっているが、細部の表現においては両者はきわめて似かよった文様表現を行っていることは注目すべきである。材質的な分析、また鍍金方法・鑄造技法においてさらに詳しく比較しなければ両者の作品の共通性は比較できないことはもちろんであるが、現段階では、この榮州出土の金銅製龍頭竿頭が沖ノ島出土の金銅製龍頭にもっとも近いものである。

4 龍頭の装着と使用法

a. 敦煌莫高窟壁画による龍頭の使用例

龍頭の使用法を考える資料として、敦煌莫高窟の壁画や韓国に遺る幡竿がある。一つは中国の敦煌莫高窟の159窟東壁に描かれた供養婦人像図にみえる龍頭である。こ

4 龍頭の装着と使用法

これはチベット王妃が侍女のかかげる天蓋の下に立っている絵であり、天蓋と天蓋をささえる竿のジョイント部に龍頭がみえる。龍頭は天蓋の重みで少し下に垂れ、龍頭の下唇の先端が天蓋の頂部の金具と接合している。竿は弓なりに曲がっている。また莫高窟第249窟（西魏）南壁中層の仏說法図に描かれた阿弥陀如来像の上に描かれた蓋の両端に垂らされた飾りの天蓋との連結部には龍形のジョイントが描かれている。この場合龍は天蓋から下方に向き、飾りものを口にくわえている。この場合の龍頭は竿頭もしくはポールトップというよりは竿と天蓋を結びつける連結金具と考えるべきものである。

これに対し敦煌石窟の壁画の中には龍頭が寺院の中にもうけられた旗の幡竿の先に取り付けられ、そこから幢幡が垂らされている光景を示した図がいくつかある（図版4）。これについては『敦煌莫高窟 第4巻』の中で中国芸術研究院美術研究所の蕭默氏が「莫高窟壁画にみえる寺院建築」と題して、主として隋～唐代の寺院建築を壁画から復元している論文の挿図の中にみえる。

これによると幡竿は左右に一对たてるのが原則であり、中に1本だけという例もある。図版4-①は初唐の釈道宣の『戒壇図経』にしるされた寺院の図で七重塔の左右に龍頭飾りのある幡竿が一对たてられ、そこから幢幡が垂れている。幡竿の高さはどれくらいか明らかではないが、七重塔の高さに近い高いものであったようである。旗竿は梯形の台座の上に設置されている。図版4-2・3・4は莫高窟壁画に描かれた寺院伽藍のトレース図であり、伽藍の中にひときわ高く龍頭飾りのある幡竿がそびえている。第61窟西壁の五台山図（図版4-2）には金堂の脇に1本、幡竿がある。第361窟北壁に描かれた仏寺（図版4-3）には山門を入った中庭の左右に幡竿が一本ずつ立てられている。柱はまっすぐにのび、先端に湾曲した龍頭がとりつけられ、龍頭の口先から笠のようなものと旗が垂れている。第146窟北壁に描かれた仏寺（図版4-4）には仏像を安置した金堂の背後の左右に龍頭飾りのある幡竿が立てられ、左側の旗竿からは布製の旗が垂れている。

この莫高窟壁画にあらわされた龍頭の使用法からみる限り、天蓋のジョイント金具として用いられた例と寺院の境内の中にたてられた旗竿の先端金具として用いられた例の二つが考えられる。ただはじめにも述べたように今まで中国には遺例がなく、その実際のありさまを知ることができない。ちなみに敦煌壁画は盛唐～中唐のころの作と考えられ、8世紀から9世紀にかけてのものである。

b. 韓国における幡竿と龍頭

幡竿の例は韓国にはいくつかあり、幡竿の実際の例、さらに幡竿をささえる支柱が寺院の中に数多く遺されている。それについて次にみていくことにしよう。

まず最初の例は韓国の李秉喆氏所蔵の「龍頭宝幢」(図版3—③, ④)である。これは高さ73.8cmのもので先端の龍頭の下に青銅の太い円筒が7本連結されている。先端の龍頭は、開いた唇の下から舌が上に巻き上がり、旗を垂らす金具となる。龍頭の基座には方形の台座があり、台座の上に龍頭の円柱をささえる方柱が立っている。さきほどの道宣の『戒壇図経』に描かれた幡竿をミニチュア化したようなものである。この「龍頭宝幢」は高麗時代の作と考えられている。この「龍頭宝幢」は屋外に設置するものではなく、屋内において一対として祭儀に用いられたものであろうと考えられる。

統一新羅時代の寺院址には、幡竿を立てた石製の支柱が残されている例が数多くある。李浩官氏はこの統一新羅時代の幡竿の支柱を集成し統一新羅の初代・中期・末期に分類している。

統一新羅初期

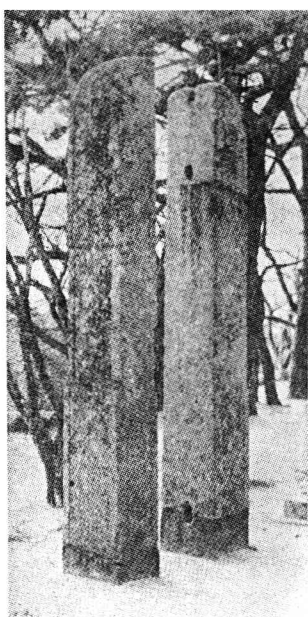


写真 6 A 仏国寺幡竿支柱
高3.64m 統一新羅中期

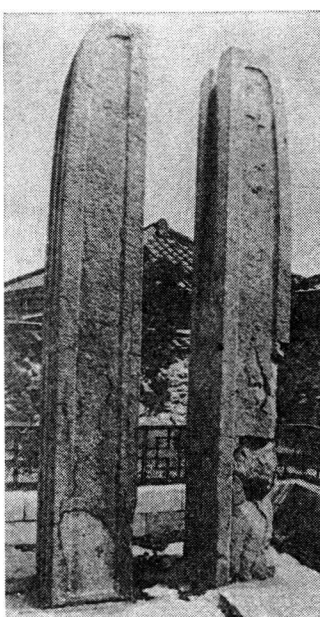


写真 6 B 公州大通寺址幡
竿支柱 高3.29m 統一
新羅

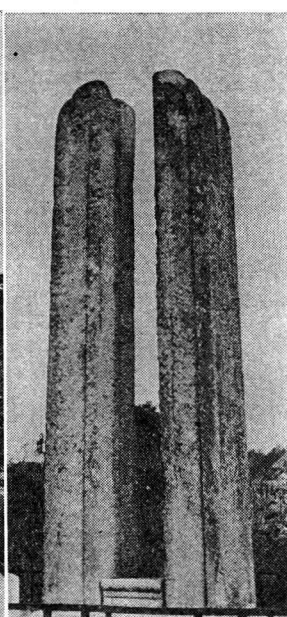


写真 6 C 益山弥勒寺址幡
竿支柱 高3.95m 統一
新羅

4 龍頭の装着と使用法

慶州望徳寺址幡竿支柱

榮州宿水寺址 //

溟州掘山寺址 //

慶州三郎寺址 //

ソウル莊義寺址 //

榮州浮石寺幡竿支柱

統一新羅中期

金提金山寺幡竿支柱

慶州四天王寺址幡竿支柱

高麗池山洞幡竿支柱

慶州芬皇寺幡竿支柱

江陵大昌里 //

瑞山晋願寺址幡竿支柱

慶州普門里幡竿支柱

公州班竹洞 //

公州甲寺 //

益山弥勒寺址 //

慶州仏国寺 //

慶州南澗寺址 //

統一新羅末期

安養中初寺址宝曆2年銘幡竿支柱

江陵水門里幡竿支柱

大邱桐華寺 //

慶州普門里短幡竿支柱

益山の弥勒寺址には石製の幡竿の支柱（写真6 C）が残されている。統一新羅時代の作といわれており、幡竿は残っていない。方形の台座の上に切石の支柱が2本たてられ、その間に幡竿が置かれたのである。支柱は高さ3.95mあり、幡竿の高さは7m以上はあったと考えられる。公州邑班洞の大通寺址にも幡竿の支柱（写真6一B）が残っている。高さ3.29mの石製の支柱で、支柱の内側には幡竿の竿留めの溝があり、基部には幡竿と支柱とを結ぶ孔が穿たれている。この支柱は礎石の上ののっており、寺院の入口を飾ったものである。統一新羅時の中期のころの作といわれる。

忠南公州郡の鷄毫と西麓の甲寺には統一新羅時代の幡竿とその支柱（図版3一2）

が残されている。幢竿は鉄製で高さ15mを測り、24節の円筒が連結されている。円筒は直径50cmで、かつては28節あったといわれ、その全長は17m以上もあったわけである。鉄製の幢竿はその基部において、石製の2本の方柱によってしっかりとささえられており、方形の基座に取りついている。

先に紹介した慶尚北道榮州出土の大きな金銅製龍頭竿頭はまさにこのような幢竿の上に取りつけられたものであり、天空高くそびえ、陽光をあびて光輝いたものであろう。そして金銅製の龍頭の口からは五色の旗が下に垂れ下がり、荘厳な儀式を引き立てたものであろうと考えられる。榮州出土の大形の龍頭の使用法としては、今日韓国に遺っている幡竿の先端金具として用いられたと考えてはば間違いないところである。

c. 小形龍頭の使用法

これに対し雁鴨池出土の一对の金銅製龍頭や湖巖美術館所蔵の金銅製龍頭、さらに沖ノ島5号遺跡出土の一对の金銅製龍頭等小形の龍頭の使用法および装着法とはどのようなものであろうか。

龍の口に旗の留金具を残しているものは湖巖美術館蔵の龍頭と、沖ノ島出土の龍頭Aがある。沖ノ島の龍頭Bは留金具は残っていないが、抜きとった痕があり、沖ノ島の龍頭は一对とも留金具があったと考えられる。雁鴨池出土の一对の龍頭は口が開いており、留金具を差し込むようにはなっていない。どちらかといえば榮州出土の大型龍頭のように口の中に金具を巻き込んで上下の牙と巻き込んだ舌で引っかけたものかもしれない。李秉喆氏コレクションのミニチュアの幢竿の旗の装着法はまさにこの方法であり、龍の口の中の巻き込んだ舌のところに旗先の金具を巻き込むようになっている。これに対し沖ノ島の龍頭と湖巖美術館の龍頭は口の中から鉄製金具（鉤）がとびだしており、両者の旗の装着法はきわめて似ているといえよう。

次に龍頭と竿の装着について韓国の例と沖ノ島の例についてみてみることにしよう。沖ノ島の金銅製龍頭は先端の円筒の両側面に一つずつの目釘孔がある。はじめに述べたように沖ノ島の金銅製龍頭はAが1645g、Bが1670gあり相当な重量である。この重量をささえるためには柄をかなり深く挿入しなければならない、この柄の動きを止めるために端部に目釘を打ち込んだのであり、目釘それ自体は装着の大きな力にはならない。

雁鴨池出土の龍頭は写真で見える限り、龍頭の後端のまわりに目釘孔が穿たれているようである。龍頭には柄はそれほど深く挿入することはできず、目釘でしっかりと龍

5 5号遺跡出土の金銅製龍頭の流伝

頭本体と柄を装着しなければならない。湖巖美術館の龍頭は、ほぼまっすぐに、水平にのびた姿であり、これに装着される柄も龍頭の主軸に平行に挿入されなければならない。端部は方柱状を呈し、方柱の側面に斜め方向に2ヶ所ずつの目釘孔が穿たれている。

これらの小形の龍頭の使用法については敦煌159窟の図のように天蓋のジョイント金具と考えることもできるし、旗竿のポールトップと考えることもできる。また建築物の先端金具と考えることも可能である。

しかしこれまでの韓国の統一新羅時代の諸例でみる限り、天蓋に龍頭が用いられた例は1例もない。巨大な榮州出土の龍頭などは屋外において天空高くそびえたものであるが、小形の龍頭は屋内において用いられた場合、祭儀の壮厳金具として用い、また建築物の柱の先端にとりつけられた飾り金具と考えられる。

沖ノ島出土の一对の龍頭はこの分類によるかぎり小形の龍頭であり、柱などの飾り金具とも考えられるものであるが、全体が鈎状を呈しており天蓋の先端に用いられた可能性も考えられる。しかし、沖ノ島という祭祀遺跡に奉獻された時点においては龍頭はそうした用途よりも、大陸伝来の宝器として奉獻されたことであろう。

5 5号遺跡出土の金銅製龍頭の流伝

これまで沖ノ島5号遺跡出土の金銅製龍頭についてその発見の状況、龍頭の形状、類例と、そして龍頭の使用法について考えてきた。龍頭はかつて沖ノ島祭祀遺跡ではみられなかった遺物であり、その出土当初から疑問がいだかれたことは先に述べた通りであるが、この点については第一発見者（松見守道氏）の詳細な記録と、その発見当初の写真があり、今日疑問をはさむものではない。ただ当初から5号遺跡にあったものかどうかについては多少の疑問が残る。

金銅製龍頭が発見された5号遺跡の主要な遺物の年代は7世紀代のものである。出土遺物の中でははっきりと年代をおさえることのできる遺物は唐三彩瓶片であり、これは8世紀の前半をさかのぼるものではなく、8世紀の前半から中葉に将来された遺物である。しかしこの唐三彩は7号遺跡からも出土しており、当初7号遺跡にあったか5号遺跡にあったかははっきりとはしない。

5号遺跡出土遺物の中で年代観をとらえることのできる他の遺物は須恵器、土師器であり、これらは北部九州の土器編年から7世紀代に考えられているものである。器台などの特殊な形態の土器は本土では類例をみないものである。

さらに金銅製龍頭については、筆者は韓国出土のさまざまな例から、統一新羅時代

のものと考えたい。統一新羅時代は7世紀の中葉から10世紀前半まであり、5号遺跡出土の他の遺物の年代ともそう大きな年代差を生じるものではない。金銅製龍頭の年代については杉村勇造氏は6世紀中葉と考えている。それは天龍山石窟の龍の形式からひきだされた年代比定である。岡崎敬氏も杉村説に基本的に従っており、「沖ノ島の龍頭を唐代まで下げるのは困難である。杉村勇造氏の指摘のように中国の東魏時代、「6世紀中頃の様式である」とすることは現在もっとも妥当な見解である」と述べている。

筆者は杉村・岡崎両氏の見解に基本的には従うものであるが、この金銅製龍頭のブローポジションと細部の装飾法の点において、慶尚北道榮州出土の「金銅製龍頭竿頭」がもっとも似たものであり、様式的にもきわめて近いものであるところから統一新羅時代の作と考えたい。

この龍頭の伝来について杉村・岡崎両氏は中国渡來說、もしくは中国—高句麗—日本説を考えている。

中国渡來說の根拠となるのは一つには中国の龍の様式からみて沖ノ島金銅製龍頭も中国製とする説（杉村説）であり、もう一つの根拠は、『日本書紀』の「欽明天皇23年8月祭」の記事から類推して中国産であるとする説（杉村・岡崎説）である。まず中国では今日まで金銅製龍頭のはっきりとした出土例はなく、岡崎氏が出土例としてあげた陝西省博物館所蔵の「龍頭形金具」は明らかに車軸金具であり、竿頭とは異なるものである。

『日本書紀』の欽明天皇23年8月祭の記事は、たしかに龍頭の伝来を考える上で興味ある記事であるが、この記事が直接沖ノ島5号遺跡出土の金銅製龍頭と結びつくかどうかは疑問である。

すなわち欽明天皇23年（西暦562年）、新羅が任那官家を滅ぼし、8月に欽明天皇が大使連狭手彦をつかわして、百済と計って高句麗を伐ちやぶり、高句麗の宮室の中から「珍宝貳賂・七織帳・鉄屋」を持ち帰り、「七織帳」を天皇に奉獻し、「甲二領・金飾の大刀・銅鑲鍾三口・五色幡二竿・美女媛」を蘇我稻目宿禰大臣に送った、という記事である。

杉村勇造氏の考えはこの大使狭手彦の高句麗遠征の際に持ち帰った財宝の中に「五色の幡二竿」があり、これこそ金銅製龍頭の竿頭のある幡ではないか、とするものである。さらにこの五色幡が高句麗が朝貢関係にあった東魏王室から拝領したものであるとする考えである。

ただこの記事に記載されている五色幡がどのような形態のものであるかはまったく

6 おわりに

明らかではない。さらに加えて五色幡が東魏王室より高句麗に与えられたという記載は全くないわけであり、この欽明23年8月条の記事をもって、金銅製龍頭が東魏—高句麗—日本という流伝を想定することにはかなりの無理があるといわねばならない。

むしろそれよりも近年の韓国国内での出土例、伝世例を中心にして新羅—日本という流伝を考えた方がより自然であり無理がないのではないだろうか。これまでみてきた諸例から考えて統一新羅時代には寺院の屋内・屋外に幢竿を立てるということがかなり普遍的に行われていたと考えられる。また幢竿が伝世しているものもあり、また幢竿の支柱だけが残っている場合もある。

沖ノ島5号遺跡出土の金銅製龍頭も当時の新羅と日本との交流の中で、我が国に将来され、沖ノ島の祭場に奉献されたものであろうと考えられる。

6 おわりに

沖ノ島祭祀遺跡から出土する祭祀遺物は4世紀中葉の遺物を上限とし、5世紀、6世紀、7世紀、さらには8～9世紀のものまで含まれている。これまで三次の発掘調査により、沖ノ島の祭祀遺跡は4つの段階をたどることが小田富士雄氏によって明らかにされた。すなわち

第一段階 岩上祭祀 4世紀後半～5世紀

第二段階 岩陰祭祀 5世紀後半～7世紀

第三段階 半岩陰・半露天祭祀 7世紀～8世紀

第四段階 露天祭祀 8～9世紀

の4段階であり、遺跡もこの段階にそって変化するものであると考えられている。すなわち岩上より岩陰へ、そして露天へと祭場は変化していくわけで、岩陰と露天への過渡的祭祀形態として半岩陰・半露天祭祀という祭祀形態が設定されている。金銅製龍頭を出土した5号祭祀遺跡はまさにこの半岩陰、半露天祭祀の段階の祭祀遺跡である。

こうした4段階の祭祀遺跡の変化は遺物構成からもたどることができるとされる。小田富士雄氏は岩上、岩陰祭祀の段階の遺物と、半岩陰半露天祭祀段階の遺物を比較して「前段階での請来品が朝鮮半島新羅からのものであったのにたいして、この段階では中国からのものに移っている」と述べ、請来遺物が朝鮮製→中国製へと移行していることに注目している。

これは沖ノ島の祭祀の対象が初期の段階が対朝鮮とのかかわりにおいて「まつりご

と」が行われたのに対し、半岩陰・半露天祭祀が対中国すなわち「遣唐使」とのかかわりにおいて「まつりごと」が行われたと考えられていることの傍証と考えられているものである。

しかし筆者は5号遺跡から出土した金銅製龍頭を東魏時代作の中国製ではなく、統一新羅時代の作と考えるものであり、この金銅製龍頭も新羅とのかかわりにおいて将来されたものであると考えるものである。すなわちこの龍頭は日本と統一新羅との通交関係の中で日本に将来され、沖ノ島に奉献されたものであると考える。

7世紀後半から8～9世紀の我が国の対外交渉の関心が朝鮮半島から中国へと移行したことは一面において事実であり、律令時代を華やかならしめた一つの要因として遣唐使の派遣があることは認めてよいことである。しかしそれはあくまで一面であり、対新羅との通交関係も、一面においてきわめて密であったと考えなければならない。

そうした意味において日本と朝鮮半島の接点に位置する沖ノ島の祭祀遺跡に奉献される舶載の宝物も7世紀以降においても対朝鮮とのかかわりを密にもったものであると考えられる。沖ノ島から出土した他の舶載遺物—カットグラス、唐三彩瓶等—の流伝についても再検討されるべきものである。

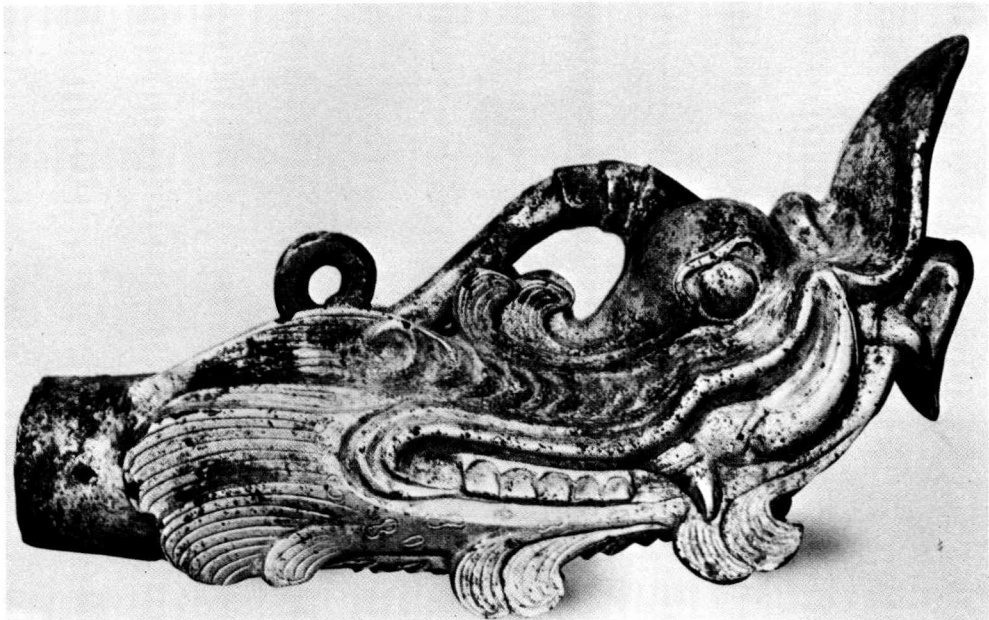
参考文献

- 『沖ノ島』宗像神社復興期成会 1958
- 『統沖ノ島』宗像神社復興期成会 1961
- 『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会 1978
- 『海の正倉院 沖ノ島』毎日新聞社 1972
- 『湖巖美術館名品図録』三星美術文化財団 1984 ソウル
- 『韓国美術五千年』国立中央博物館編、1976 ソウル
- 『雁鴨池発掘調査報告書』文化公報部文化財管理局 1978 ソウル
- 『中国石窟 敦煌莫高窟4』平凡社 1982
- 『考古美術』158, 159 韓国美術史学会 1983 ソウル
- 『国立光州博物館』国立光州博物館編 1978 ソウル

(出光美術館)



(1) 金銅製龍頭A 長19.5cm



(2) 金銅製龍頭B 長20.0cm

沖ノ島5号遺跡出土の金銅製龍頭



(1) 慶州雁鴨池遺跡出土の金銅製龍頭 長15.7cm 高10.5cm 統一新羅時代

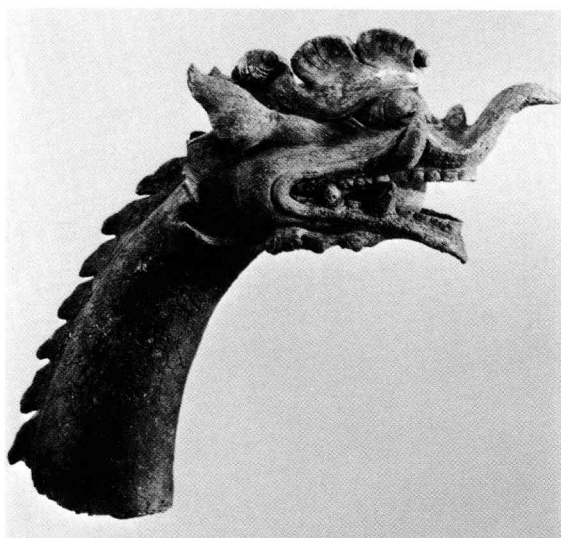


(2) 湖巖美術館所蔵の金銅製龍頭 長35.2cm
高30.5cm 統一新羅末～高麗時代初期

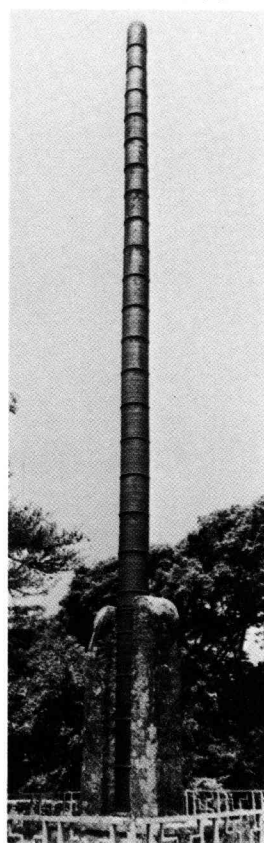


(3) 国立光州博物館所蔵の金銅製龍頭 長23.5cm 24cm 高麗時代

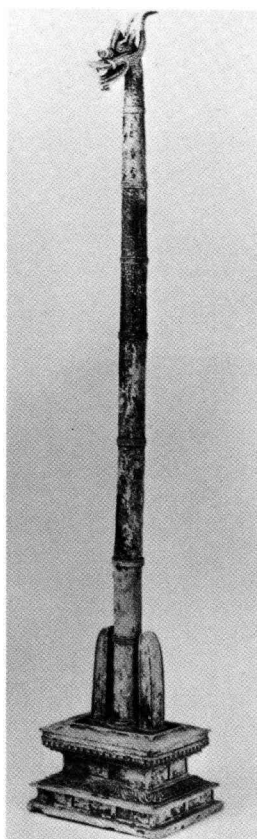
韓国出土の金銅製龍頭



(1) 金銅製龍頭 全長65cm 慶尚北道榮州出土
統一新羅時代



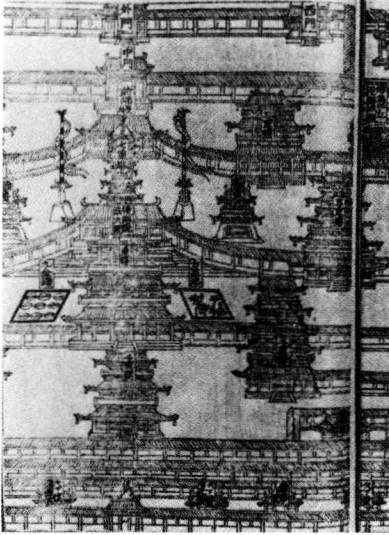
(2) 鉄製幡竿と石製支柱 幡竿高15m 支柱高3m
忠清南道公州郡鷄龍面中莊甲寺境内 統一新羅時代



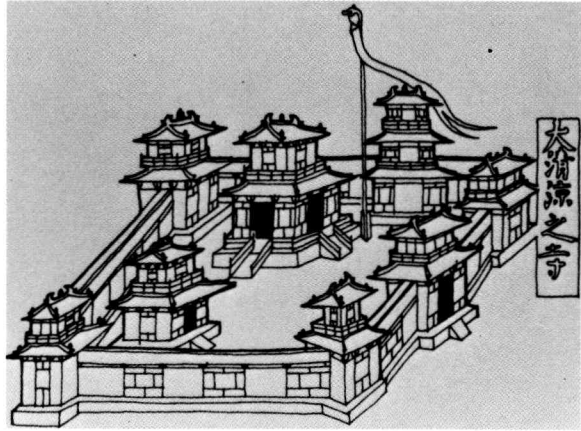
(3) 金銅製龍頭宝幢 高73.8cm 下台幅
20.9×16.0cm 李秉喆氏蔵 高麗時代



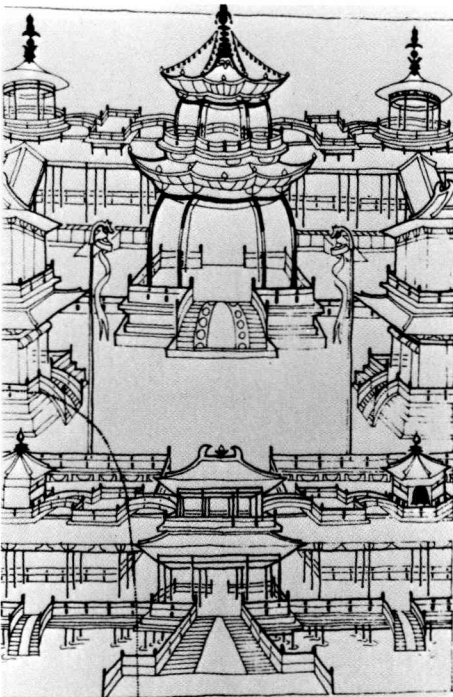
(4) 金銅製龍頭宝幢の龍頭細部
韓国出土の龍頭および幡竿



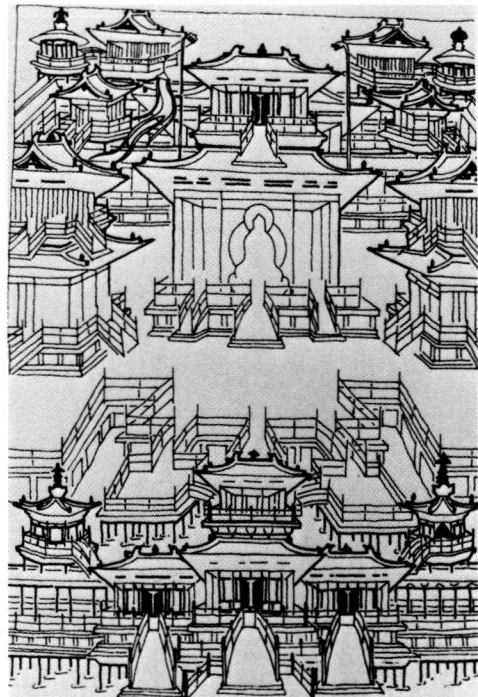
(1) 道宣『戒壇図経』寺院図
初唐



(2) 第61窟西壁五台山図中の伽藍 宋初



(3) 第361窟北壁経变中の仏寺 中唐



(4) 第146窟北壁経变中の仏寺 五代

敦煌莫高窟に描かれた幡竿（蕭默氏論文より）